

第 49 回 歴史リレー講座「高安城は大和の国にあった

—河内国分寺下層遺跡は、高安城の一部であった— 菅谷 文則氏 (H30.10.21)

日本がまだ倭と呼ばれていた 600 年代、朝鮮半島は高句麗、新羅、百済が激しくせめぎ合う三国時代でした。その頃の百済は、超大国である唐の後押しを受けた新羅からの進撃に苛まれていました。そこで、以前から親交のあった日本に幾度となく助けを求めてきたため、飛鳥の斉明天皇が軍隊を伴い瀬戸内海経由で九州へ上陸。天皇が同地で死去した後は息子の天智天皇が百済軍を援護するも、663 年の「白村江はくすきのえの戦い」で日本と百済の連合軍は大敗を喫しました。その後は新羅と唐の襲来に備えて高い石垣を持つ金田城きんでんじょう（対馬）や大野城（福岡県太宰府市）が九州に築城されます。

さらに、瀬戸内海にかけても屋嶋城など朝鮮式山城の築城が相次ぎ、西日本では 150 か所ほど確認されています。高安城築城もその頃ですが、目的は飛鳥の都を防禦することなので他の城とは築城の意図が異なります。したがって、その構造にも大きな違いが見られます。

『日本書紀』には天智天皇、天武天皇、持統天皇らが高安城を訪れたという記述があります。その高安城はどこにあったのでしょうか。河内に「高安」という地名があることから河内側というのが従来の説でしたが、大正 7 年の「奈良県史跡勝地調査会報告書」に記された高安城防備線を見ると、大和側に位置することがハッキリと確認できます。かつて八尾の研究者たちが懸命になって高安城を探し回られ、出土した土器から奈良時代のものでありましたが、倉庫跡を見つけられたのも奈良県平群町の大和側でした。

さて、ここ王寺町の明神山（標高 273.6m）ほど四方八方に万遍なく景色が広がる場所は、そうありません。当時の飛鳥京、藤原京、平城京はもちろん、大津宮、比叡山、蓬萊山、高見山、大峯山、三国山、天候によっては遠く淡路島や明石海峡まで一望できるのです。当時の明神山が軍事監視所であり、敵の襲来に備えるために狼煙台が設置されたと推察するのも当然ではないでしょうか。狼煙は燃やす材質によって色（赤、黒、白）が異なるので、情報に深みが出てきます。ちなみに、大正時代までは大阪堂島の証券取引所でのコマ取引は通信手段として狼煙と手旗信号を活用していました。

また、明神山には柏原市の河内国分寺へ通じる山道が存在します。しかも、同寺のすぐ北方に残る（大和川北岸）柏原あおたにの青谷遺跡（竹原井行宮跡）は、聖武天皇らが難波に向かう際に立ち寄った行宮あんくうでした。発掘調査ではきれいに整った遺構が発見されています。

『日本書紀』に「倭国高安城」とあるように、高安城は大和国に存在し、しかも最も重要な監視所は明神山に置かれていたと私は考えています。生駒山という説もありますが、尾根が南北に長いので高安城から狼煙が判断しにくいのが難点です。ちなみに、私はかつて明神山と信貴山の間で手旗信号実験を行ったことがあり、通信が十分可能であることを確認しています。

このように、明神山からは難波から海船で押し寄せてくるであろう唐・新羅軍をいち早く発見することが可能です。敵軍は四天王寺から旧大和川を経て太子町を経由したのち、竹内峠（葛城市）を越えて飛鳥に攻め込むはずで、そこで、日本としてはできる限り大和川の亀の瀬の難所へ船を誘導し、最終的に沈没させるという作戦で臨むのが上策です。難波の港から多くの大小の施設を設けて、日本側の計画ラインに乗せようとしていたと考えられます。国分寺跡、青谷遺跡、高安城などがそのための重要な施設です。

こうしてみると、奈良時代までは大和川沿岸の王寺や斑鳩、河合周辺は、都である飛鳥とは別の「第二の首都圏」だったと私は推測します。高安城がどこにあったかという問題も、自然環境や周辺の軍事施設などを含めた全体的な観点で見直すことが重要ではないでしょうか。